



障害者の福祉向上に尽力し

県知事褒章を受章した

伊藤 梢 さん



PROFILE

いとう こそえ(佐倉二区)

23歳の時、交通事故で左足に大きなけがを負う。また事故から15年後には脊髄の病が発覚。それ以降は車椅子で日常生活を送るようになる。

26歳で身体障害者福祉会の会員となつてから現在まで、病を抱えながらも市内に住む障害者の福祉向上に尽力している。

受賞は周囲の支援のおかげ

長年にわたり身体障害者の福祉向上に貢献した人や自立更生に努力した人を表彰する「第62回静岡県身体障害者福祉大会」で9月4日、伊藤梢さんが県知事褒章を受けた。

今回の受賞に対し伊藤さんは、「私が身体障害者福祉会に所属して50余年が経ちます。この間、少しでも障害者の皆さんの力になろうといくつかの困難を乗り越えてきました。このような賞をいただけられたのも、これまで支援してくれた皆さんのおかげです。身に余る光栄と感謝の気持ちでいっぱいです」と話す。

障害者福祉に大きく貢献

伊藤さんは23歳の時にけがをしたことから、26歳で身体障害者福祉会に入会した。同会は、身体障害者が住み慣れた地域で安心して生活できるように活動している団体だ。

同会で市内の障害者福祉に尽力する伊藤さんの活動は幅広い。これまでに相談員を5年間、会計を20年間務めた。さらに身体障害者への理解を

深めるために小中学校で講演会も実施。それらの事業の企画・立案・準備なども一人でこなす。

「1つの事業が終わってもすぐに次の事業が始まるんですよ。休んでいる暇はありません」と笑顔で話す伊藤さん。これほどまで障害者福祉に尽力する原動力となっているのは、事業に参加した会員が見せる笑顔だという。

障害者が住みよいまちに

伊藤さんは、新型コロナウイルスの影響で、これまでのように会員と交流する機会が減ってしまったことが残念だと話す。「こんな日常だからこそ、これまで以上に互いが手と足と目と耳となり助け合いたいです。また、私たちは車イスに乗っているため、日常生活でも健常者である皆さんの介助が必要になることがあります。今後も障害者が生活しやすいまちづくりをお願いします」と思いを語る。

現在も難病と闘い続けている伊藤さん。これからも会員の期待に応えるため、障害者福祉にまい進する。